

西大寺会陽

池松 孝子

岡山の西大寺会陽は日本三大奇祭の一つ。『日本の祭り歳時記』によると、秋田のなまはげ、山梨の吉田の火祭りと共に挙げられている。

西大寺は備前の要港として栄えた吉井川の河口にある。高野山真言宗の別格本山の寺院として、一二九九年に焼失するまでは本堂、三重塔、鐘楼、仁王門を構え、地方屈指の大寺院であった。次第に庶民の信仰を集めるようになり、守護札を求めて参詣者が殺到するようになった。そのため僧侶が、集まった参詣者の頭上に札を投げたことが始まりという。また、西大寺では冬の会陽のほかにも、夏の「夜待ち祭り」「水祭り」なども行われている。

西大寺会陽は室町時代に始まったと伝えられている。会陽は、五百年以上続く裸祭りとして祭りとして国指定の重要無形民俗文化財だ。その日は約一万人が参加し、訪れる観光客は三万人ともいわれる。

かつては旧暦一月十四日に行われていた。私が小学生の頃までは新年を迎えると近所の大人が「今年の会陽は何日になるのかな」と話しているのをよく聞いたものだ。そのうち裸祭りが全国的にも有名になり、観光化されるようになって二月の第三土曜日に執り行われるようになった。

当日、日が暮れるとまわし姿の一万人もいわれる男衆が「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声とともに本堂に向う。この裸祭りには中学生以上、刺青、飲酒のない男性ならだれでも参加できる。最近は、効率を考えたか、会社、地域などのグループで連携して有利に宝木（しんぎ）を奪い合うグループもあるようだ。夜十時を合図に香を焚き込めた宝木が本堂御福窓から、陰陽二本、群衆の中に投下される。厳冬の深夜、二本の宝木を巡って、まわし姿の男衆が激しい争奪戦を繰り広げる。男衆の体温、熱気からくる湯気が籠るように立ち込める。幸いにも宝木を手にした男はその年の「福男」になる。

裸祭りが終わり、奈良の東大寺二月堂のお水取りが終わると故郷には待っていた春がくる。